

ゼンダ・バード、 アフガニスタン！

—アフガニスタンよ、永遠なれ！—

甲斐 大策

聞き手：佐多保彦 株式会社東機質 代表取締役社長

佐多：甲斐さんも「ベシャワール会」の中村哲先生も石風社（福岡）からご本を出されていますが、九州にはユニークな方がおられるようです。元気が湧いてきます。アフガニスタンと33年間生身でつき合っただけの甲斐さんにはなにか真実の話を伺いたい、ついにご自宅にまで押しかけてしまいました。

このお部屋の絵はパーミヤーンの大仏の絵のようですが、これは実際にあったお話をもとに描かれたのですか。

甲斐：いえ、これは私の創造です。もう4年がかりで取り組んでいますが、大仏が完成したころは黄金に輝いて、落慶の奉祝行事があったに違いないので、その光景を再現しようと試みているのです。私が関心をもっているのは大仏そのものもそうですが、それを上回って、高さが55mもあるこんな桁外れなものを造らせた人間というのは、どんな心の持ち主だったのだろうということです。三蔵法師玄奘が訪れたときは、まだ全身が金色に輝いていたと記されています。佐多：そもそもどういっしょにアフガニスタンに行かれたのですか。甲斐：大連で過ごした幼少期の思い出、画家であった父親の影響がやはり大きいでしょう。また家に入り出していたのがアジア内陸に深く愛情をもつ詩人や文学者という方々ばかりでしたから、常に身近にアジアというものがあった。大学で仏教美術を専攻したこともあり、1969年にアフガニスタンへ向かいました。仏教美術はそれとして、とにかく人間が面白くて、なんとしてもこれからはアフガニスタンだ、という感じになっていました。

訪れる側のエゴとしては変わってほしくないと思っていますが、そこで生活している側からすると本当に厳しい世界なのです。例えば遊牧民が風に吹かれて歩いている姿は実にロマンチックな光景ですが、つき合ってみたらほとんどの人間が梅毒だったり、眼はトラコーマにやられていたり。彼らとしたら変わらなければたまらないわけですが、近代工業世界の視点だけで、あの国を理解することはできません。

30年以上アフガニスタンと接してきて得た結論は、我々日本人は「こうすれば生きていきやすい」というところへ全てを収斂させていきますが、彼らの世界は「こうでなければ生きていけない」という非常にぎりぎりのところで成り立っているということです。そうすると、「殺すか、兄弟になるか」という鮮烈な世界が出来上がる。中途半端は許されないのです。かといって、その二極が短絡しているわけでは



甲斐 大策 / かい・だいさく

1937年旧満州大連生まれ。早大文学部東洋美術史科卒。60年代後半からほぼ毎年アフガニスタンを訪れ、アフガン人と義兄弟の契りを結びイスラム教に入信。画家として、また88年以来作家としてアフガニスタン、パキスタン、インドを素材にした作品を発表し続けている。その文学的個性は中上健次氏、五木寛之氏から絶賛を浴びる。主な著書に『生命の風物語』『神・泥・人』『餃子ロード』（以上、石風社）など。九州福岡県在

ありません。実に繊細に人間をみつめた結果なのです。

佐多：甲斐さんにはたくさん「兄弟」がおられることでしょうか。

甲斐：ほぼ全ての民族に「兄弟」と呼び合う友がいます。タリバンが生まれる前の、まだ内乱状態にあったアフガニスタンで、友情の延長線上でランチャー（※1）を肩にかついで参戦したことがあります。カーブル（※2）を攻撃していたことですが、当然彼らにも私にもカーブルに友人がいる。だから「あの山を撃ていよう」と、皆でわざと的をそらして郊外の山ばかり撃っていたことがありました。そして村に帰ったら今度は周辺の地雷撤去です。話だけ聞いておられると怖いのですが、我々の周りには野生のラベンダーがたくさん咲き、蜂が飛びまわっている。実に美しい光景です。若いムジャヒディン（聖戦士）が蜂を飼っていて、ラベンダーから採れた蜂蜜を瓶いっぱいにくれました。銃を片手に持ちながら、そのとき彼がこう言ったのです。「蜂は地雷を踏まないから働いてもらわないとね」と。むごさと優しさが同居する世界です。

佐多：イスラムについてはなにも知らず恥ずかしいのですが、アフガニスタンについても昨年の9.11事件とその後の展開までは関心をもっておりませんでした。

甲斐：彼らの内面は実に豊かです。好戦的なイメージばかりでとらえるのは失礼で、少年でさえ詩の数行は暗誦（しきりつ）しています。よく言うのですが、彼らの識字率は2、3割でも「識詩率」は10割だと。

佐多：「識詩率」とはすばらしい言葉ですね。

甲斐：中国の科挙（※3）という制度をとっても、難しいということだけが話題になりますが、試験では詩への理解度などの比重がとても大きかったです。中国でもイスラムでも、詩を理解する心は伝統として今でもしっかりと生きています。

そして、移動系民族の文化は融通無碍（ゆうつうむげ）というか、なんでも柔軟に取り込み、なにもものにもとられない。パーミヤーンの大仏がその最たるものです。こんなものを造ったからには国が傾いたことでしょう。そして彼らは記録を残さない。パーミヤーンの大仏についてもなにも



バーミヤーンの大仏完成時の落慶奉祝図
(甲斐氏のご自宅にて)

伝承されていません。造る、壊れる、そして消えていく。とても深い民族です。

佐多:男女共に非常に美しい人が多いですね。

甲斐:かの有名なアレキサンダー大王やペルシア中世の英雄ルスタムが遠征中にアフガニスタンでひっかかってしまったくらいですからね。アレキサンダーは東洋の文化にひかれ続け、ついにはマケドニアの衣装を脱ぎ、インド風の格好を装ったともいいます。

佐多:東洋の精神に直接触れて、全く違う人生の価値観をもって生きている人々の存在に気づいたのでしょうか。

甲斐:カーブルからインド西北部地域を支配していたギリシア人のミリンダ(メナンドロス)王が、今のパキスタンのタキシラでインドの高僧と哲学的な討論を交わしたという、有名な「ミリンダ王の問い」という問答集があるのですが、そこで西の論理と東の論理がぶつかりあう話があります。彼はさらに深く東方の思想を理解することになった…。そのような話がたくさんあります。

イスラムは、精神世界に重点をおいた、無限に抽象的な、手で触れ得ない形而上世界を目指します。たった1歳半の私の娘を伴ってアフガニスタンを旅したことがあります。肺炎をこじらせた娘のために“兄弟”が寝ないで祈り続けてくれたことがありました。私が礼を言うと、「娘さんの回復を願って祈っているわけではない。そのため祈るのもよいが、(それ自体は)意味のないことだ」との言葉が返ってきて衝撃を受けました。彼らの祈りは、娘の回復という現世的願望を超越したところにあるのです。この衝撃が、私をイスラムとアフガニスタンに本格的に踏み込ませるきっかけとなりました。

昨年からの一連の出来事は、言ってみれば「近代」の総決算だと思うのです。近代の対極にイスラムがある。アフガン・イスラムの「抽象」の世界が西欧的「具象」の世界とかみ合うはずがありません。

そして近代西欧がもたらした一番の弊害は国家という概念です。アフガニスタンは多民族を抱えたまま、1世紀ほど前にパンシュトゥン王朝が独立を宣言し、前後して英国と帝政ロシアの都合で国境が制定されました。諸民族の意向などは全く反映されずに、ただ国境線がひかれたのです。国家という枠組みを唯一無二の秩序とする結果、多くの民族が血を流しているではないですか。

「ゼンダ・バード」という言葉があります。パンザイというような

意味で、やたらと彼らは使います。ただ語源をたどると「生命の風」という意味のようです。「生命の風よ、吹け!」ですね。対ソ連戦のときに、私のそばで機関銃を撃っていた兄弟が叫び出したのです。興奮してくると彼は「ゼンダ・バード バクティア(※1)!」と顔を真っ赤にし全身をふるわせて、自分の出身地バクティアの地名を絶叫し始めました。それを聞いた途端、涙があふれてどうしようもなく、彼の故郷を思って、気持ちの高ぶりを禁じ得ませんでした。彼らには本当に近代西欧のいう国家の意識はないのです。

佐多:これからとてつもない額の援助が開始されますが。

甲斐:イスラム原理主義というよりも、それ以前に人間原理主義ありきだと思うのです。彼らは人間が根底にもっているあらゆるもの、善悪、愛憎、貴賤、聖俗全てを貧困と過酷な状況の中で保たざるを得なかった民族です。泥と干ばつしかない世界では原理しか残りません。あとは人と神だけです。粗暴、愚直、剛直、野卑、そして好戦的と周辺諸国が陰口を叩きますが、それは確かに全て正しい。しかしだからこそ今まで保たれてきた人間の誇りと輝きがあるのです。

巨大な資金がカーブルに入ってくることで、アフガン民族がどう変化するのか正直不安を感じています。援助金の3割が真水として使われればよい方だと言われていますし、まして農村部や山地にまで援助金が回ってくるのかと心配です。カーブルは一見豊かになるかもしれませんが、都市部と農村部の格差がますますはつきり現われてくることでしょう。

アジアの抽象性を知っていた者として、我が日本には近代西欧のものさしをもっと融通のきく形にもっていける力が残っているはずです。例えば、バーミヤーンの大仏遺構をどうするのかという議論、破壊に至った真実の検証、それは日本が率先して進めるべきでしょう。

私はアフガニスタンから多くのことを学んできました。これからも誇り高い彼らと人生を共有し、彼らを人生の師とし兄弟として生きていきたいとの思いをいっそう強くしています。

(※1) 携帯可能なロケット砲の一種。

(※2) アフガニスタンの首都。メディアでは一般的に「カーブル」と称されているが、正式には「カブル」。

(※3) 中国、隋王朝初期から実施された高等官資格試験制度。清王朝末期に廃止。

(※4) パキスタン国境に近いアフガニスタン東部の州。